

ビリギャルの話から（その2）

前号に引き続き、「ビリギャル」の話です。

塾講師である、坪田先生がビリギャルさやかを指導します。その結果、慶応に合格するのですが、指導方法にとっても興味がありました。坪田先生が実際にどうしたかを引用し、学校や家庭で生かせそうな内容を考えてみたいと思います。

目標・計画の立て方・モチベーションの上げ方

坪田先生は、さやかが塾に来たばかりの時、大学受験で大事なことを3つ挙げています。

①メンタル、②目標、③計画です。それぞれの坪田先生のお考えを見てみましょう。

成長のためのその1 メンタル

「コロンブスのタマゴ」の逸話で、みんながタマゴは立たないと言ったけど、コロンブスは、タマゴの殻を少し割って立てて見せた。この言葉は、最初に思いつくこと、成し遂げることは大変だという意味で使われます。実際、タマゴは微調整をすれば立つ。でも、「タマゴは立たない」という先入観があれば、あきらめてしまう。「タマゴは立つ」ということを知っていることが大切だ。



自分が成功することを「知っている」こと。自分が天才だと「知っている」こと。根拠なんていない。「知っている」だけでいい。もし、そう思い込めないなら、「言葉に出して、みんなに言いふらすといいよ」。たぶん、周りは「バカだ」とか「無理だ」というでしょう。だけど、何と言われても言い続けることで、自分自身がそう思い込み始める。これが大切なんだ。そこに2, 3人でいいから、信頼できる人から肯定が加えられれば、知らぬ間に人は伸びていきます。

「言いふらすことの効果」で検索すると、「有言実行＝口に出すことで後に引けなくなる」「協力者が現れる＝他の人から情報を得られることや具体的な支援が得られる」「自分自身の言葉を聞き意識する＝なるためにはどうしたらいいか考え、興味を持つことで様々な情報を手にする」の3つが出てきました。なるほどと思います。特に3つの目のことは「カラーパス効果」と言い、特定のことを意識し始めると、そのことに関する情報が目に入りやすくなる現象だそうです。



成長のためのその2 目標

神様が現れて、プラチナチケットをくれた。そこにきみのしたいことを書けば、どこの学校にも入れてくれる、その実力を付けてくれる、環境も用意してくれる。こんなすごいチケットをもらったなら何をしたい？と聞きます。すると多くの「夢がない」「志望校がない」と言っていた子どもたちがいろいろな答えを出してくれます。それでも夢を思いつかない子もいます。そういう子は、「自己効力感」が足りないと言えます。「自己効力感」とは目標を達成するための能力を自らが持っていることと認識することです。

それと、あらゆることに対して「逆カラーパス効果（何にも興味が抱けないので、それに関する情報が入って来ない効果）」というべき状態とも考えられます。

自分のしたことに達成感を覚えたことがなかったり、周囲にポジティブな影響を与えたと感じたことがなかったりすると、人というものは、何かに興味を持つこと自体難しくなるのです。

その場合、具体的にはその子が最も苦手とする教科などの行き詰っている段階まで立ち戻って、その問題を解けるようにしてあげて、「無理だと思っていた超絶苦手教科すら、クリアできるんだ」ということをまず体験させて、少しずつ「自己効力感」を持てるようにしていくことです。

成長のためのその3 計画

目標ができれば、計画です。どれだけ無謀と言われることでも、目標から逆算して、それを達成させる計画を作るのが「プロ」の仕事です。そして、志望校のレベルや、求められていることを知り、生徒の学力を知ったうえで計画を立てることです。

- ① 目標校が決まったら、早めに過去問を手に入れます。そして「傾向」などをさらっと読みます。
- ② 超基礎の問題集を1冊必ずやります。(2週間～1ヶ月) みな、高い目標設定をしようと、とかく、すぐに「難しいこと」をやろうとして失敗します、自分でもバカにするような平易な問題で、かつ薄い問題集からやることです。「本当に」それをバカにできるレベルなら、超短期間で終わるはずですよ。これをサッサとやり切りましょう。ダメなら更にレベルを落とします。
- ③ タイマーを使って学習する。ざっと教材をながめ、かかりそうな時間を予測して、その予測時間×0.8をタイマーでセットします。長時間勉強したことをほめるのは無意味だと知りましょう。「テスト」も「社会に出てからの仕事」も短い時間でこなすほうが、ほめられるものなのです。常にタイマーを使って時間のプレッシャーをかけて、本番と同じような意識で普段から勉強することです。

坪田先生は受験勉強をさせる塾の講師で、私たち教員とは違う立場ではありますが、参考にすべきことは多いと思います。

私が感じることをいくつかお話しします。

1つめは、有言実行です。学習は「意識付け」がすべてのように思います。いかにモチベーションを高め、その環境に置くかです。「言いふらす」ことは効果がありそうです。声に出してみましょう。そして、保護者はそれを否定しないことです。すぐに「そんなことできないでしょう。」と言っていないですか？子どもの思いや願いを引き出し、意欲を高めるのは他人の肯定であり、支援であることが坪田先生の記述から見えます。ただし、言うだけで、次のアクションである目標や計画に進まないのなら、見直しを進めるべきかもしれません。



2つめは、「成功体験の積み重ね」です。「できない、分からない」の繰り返しではモチベーションが下がるのは当然です。当校では、家庭学習でAIドリルである「ドリルパーク」での学習を推奨しています。是非学習に苦手意識のある生徒は、学年を下げ、場合によっては小学校の低学年から取り組んでみてください。「計画の②」の考え方です。「できた」「分かった」の繰り返しの効果があることは間違いありません。保護者としては学年を下げ、学習するわが子を見守る余裕と勇気があるかどうかです。

少しでも家庭での学習支援の参考になればと思います。

引用「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話 坪田信貴著 角川文庫

「ダメ親と呼ばれても学年ビリの3人の子を信じてどん底家族を再生させた母の話 ああちゃん、さやか著 KADOKAWA